

# 山本昭宏 『核エネルギー言説の戦後史1945-1960—「被爆の記憶」と「原子力の夢」のアクチュアリテイ』

西 亮太

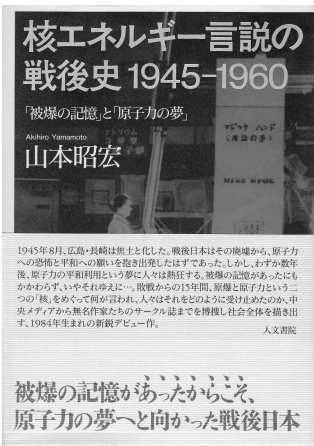
二〇一一年三月一日の「震災」とそれに引き続く福島原子力発電所での甚大な事故から二年が経とうとしている。復興庁の一月報告によれば震災当初は四七万人以上とされた避難者は現在では約三二万人であるという。単純に数値をみれば二年を経たずにおおよそ一五万人が避難生活から解放されたということになるのか。メディアを席捲した放射能汚染に関する報道は明らかにその頻度を減らしている。あの危機的状況から時間が流れ、この社会は「日常」に戻ろうとしているようにも見える。私は東京都の多摩地域在住だが、スーパーの野菜売り場でも福島産というラベルを、震災以前と同様に見かけるようになってきている。とりあえずは、こう問うてみよう、「あの危機的状況は忘れ去られようとしているのだろうか、今も危機的状況の延長線にあるはず

の三二万人以上の人びとの存在をも含めて」。だがこの道徳心をくすぐる問いかけは即座に問い返されなければならない。誰あるいは何が何を忘れようとしているのか、と。「私は忘れていない」と言ってみたところで、それは実際に薄れていつているように見える社会的関心に対する「私」の優越感を引き出し、自分の正義感や道徳観を確認するだけかもしれない。そもそも何を忘れまいとしているのだろうか。受動態で巧妙にごまかされてはいるが、忘却という行為を担っている主語は「わたしたち」なのだろうか。だが果たして「わたしたち」は同じ経験をしているのだろうか。

「もう」二年なのか、「まだ」二年なのか、どういった表現でここまでの時間を記述するのか。このささやかな著述においてさえ、誰も自身の立ち位置から、自分がどういった態度をとってきたかという問いから逃れることはできない。この問いへの応答は、ひろく「被災地」と呼ばれる地域の中においても一枚岩ではありえないし、その外にある存在にとつても同様ではありえない。また、一個人の内部においてさえ一貫した態度を見出すことは難しいかもしれない。これは「震災」の経験の様相においても同様だ。あの危機的状況を過ごした誰もが「震災」あるいは「原発事故」を体験したと言えるのだろうか、その経験の仕方は当然ながら一様ではありえない。どこにいてどのように生活し何を考えてきたか、そういった個人的な経験や記憶に則して経験の様式が形成されるのだから、あの危機的状況に対する記憶やそれ以降の態度が個々人において異なっているというのは当然と言える。したがって、「私」という立場からしかわたしたちは語りだすことができ

とはいえ、個々人の経験の様式や記憶の在り方、あるいは特定の現象に対する態度が常に自由に決定されるということもまた、当然ながらありえない。家族であれ地域共同体であれ、あるいは階級であれ、それぞれの「社会」の中でひとは経験や記憶の様式を学びその影響下において体験をする。したがって「震災」あるいは「原発事故」に引き戻していえば、個々人の経験は決定的なことなるものの、同時に、相当程度、そのひとの社会的あるいは文化的位置、あるいはそのひとの属する共同体に規定されている、ということになる。したがってミクロにせよマクロにせよ共同体内の「わたしたち」から遊離した「私」からのみ語りだすということとはできない。

それぞれに異同を含む個々の経験や記憶が相互的な変容を経ながら「コミュニケーション」<sup>(5)</sup>とされていくこの緊張に満ちた関係の総体を社会と呼ぶならば、そこに付け加えるべきは、ここで「個々の」と呼んできたそれぞれの経験や記憶の在り様はそれぞれがお互いに対してあらゆる意味で平等ではない、という事実だ。個々



1945年8月、広島・長崎は世上と化した。戦後日本はその崩壊から、原子力への恐怖と平和への願いを思ひ出発したはずであった。しかし、わずか数年後、原子力の平和利用という夢に人々は熱狂する。被爆の記憶があたかもわかかわらず、いやそれゆえに、戦後からの15年間、原爆と原子力という二つの「鏡」をめぐって暗がりが行われ、人々はそれぞれのように受け止めたのか、中央アジアから無名作家たちのサウダグの記を転写し社会全体を掘き出す。1984年生まれの新鋭デビュー作。 大又直哉

被爆の記憶があったからこそ、  
原子力の夢へと向かった戦後日本

この中でこそ世論あるいは「輿論」が形成されるのだと考え

られる。これを逆から観れば、「輿論」およびその形成過程は社会と呼ばれる関係の総体を少なからず映し出すものであるということになり、その精査によつてこそ社会の全体を把握する一歩を踏み出すことができる、ということができよう。またさらにその世論あるいは「輿論」の形成過程そのものが社会の変容過程そのものと深く関わっている、という点も加えておきたい。一般的に歴史と呼ばれる記述様式はこの変容過程をとらえようとするものだと言えよう。

冒頭の問いは次のように変換されるべきだろう。「震災や原発事故への関心が変化しているわたしたちの社会では、いったい何がおきているのか」と。「私」と「わたしたち」あるいは「かれら」の間で責任の所在を探すことに終始するのではなく、その関係の総体たる「わたしたちの社会」の変容過程にこそ、注意は向けられるべきだろう。その変容の歴史の中に今回の原発事故が起きたのであつてしてみれば、現在の「わたしたちの社会」を掴み取るためにはこの歴史の再吟味は避けられない。こういった問題意識に則して原発を考えるとき、「唯一の被爆国」を自認する日本にいかにして原子力発電所が導入され得たのか、その過程を考察する必要がある。その際に重要な視座を提供してくれるのが山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960』。「被爆の記憶」と「原子力の夢」である。

書評としてはあまりにも長い前置きとなつてしまつたが、現在の日本において本書を手取るということの、そして本書で展開されている議論のアクチュアリティを私なりに提起してみたつも

りだ。本書における議論の洞察は「唯一の被爆国」という自認とそれに基づいた反核平和運動という歴史的事実と原子力発電所の導入という、現在の視点からみると矛盾するように思われる事象がいかにして可能となったのかという点を、「被爆の記憶」と「原子力の夢」をキーワードに「輿論」の諸相において解きほぐそうとしている点にある。なぜなら、この相互に排他的に見える事象が「輿論」においてその関係をどう変化させたか、という点を明らかにすることが本書の目的とされているのだが、その問題構成はわたしたちの現在の社会における「輿論」へと変容しつつながつていると考えられるからだ。「わたしたち」の「震災と原発事故の記憶」はどのようにして「復興・発展の夢」と接続されているあるいはされていないのだろうか。もちろんこの問いに応えることは書評の枠を大きくはみ出すものである。だが現在の社会に関わる一人の個人として、「アマチュア」として本書の洞察を私なりに整理しつつ、ないものねだりにも似たいくつかの補助線を引くことで、わたしも社会およびその「輿論」の変容に微力ながらも寄与したいと思う。

### 「平和利用」と「動力源」の関係について

まず本書第一部および第二部において目を引くのは、戦後直後における「原子力の夢」と呼ばれるものが、今でいうところの「原子力発電所」の議論に直接的に接続されていたわけではなかったという点であろう。「原子力発電所」と「原子力の夢」あるいは「平和利用」が同義になる以前には、大規模な土木工事や気象の

直接操作などと並立的に、原子力の動力源としての可能性が述べられていた、というのだ。ここにはある種「爆発物」としての原子力エネルギーが想起されていたのであって、そうだからこそ今でいうところの核抑止論に近いものとしての「夢」も並置されることが可能であった、ということになる。だがそうなると、そういった原子力あるいは核の「夢」がなぜ「原子力発電」に特化していったのかという問いが出てくる。これは逆に言えば、今の「原子力の平和利用」原発」という等式が成り立つ以前に、原子力の肯定的イメージが可能であった、ということになるだろう。これを可能にした条件として筆者は当時の知識人言説における「科学」や「技術」あるいは「民主主義」が持っていた特別な意味と、GHQによるプレスコードを挙げる。だが、では実際に「科学」や「技術」あるいは「民主主義」なる語が当時持っていた意味とその来歴はどうなっていたのだろうか。ここで想起すべきは、本書では正面切つては論じられないものの、湯川秀樹と並んで言及回数が多い、武谷三男であろう。

武谷は京都帝国大学において湯川の研究室に入り中間子論の発展に貢献したが、同時に科学者の立場からマルクス主義研究もを行い、戦時中には治安維持法違反で二度にわたって検挙されている。特高警察への調書として書いた「技術論」<sup>6)</sup>は戦後「弁証法の諸問題」(Q&A)に所収され、高い評価を受けた。武谷の重要性はその原子物理学の独自の提示の仕方にある。武谷はヘーゲルの弁証法にのっとって独自の認識発展の三段階を提示しており、その最先端として、つまり弁証法の止揚の段階として原子物理学を提示している。武谷の科学観や歴史観にははつきりと発展史観が認め

な問いへとつながっている。

### 電力エネルギー源としての要請と「ブラックボックス化」

では、なぜ「平和利用」が動力源すなわち原発の導入へと特化されていったのだろうか。本書では主に、原子力保有国としてのソ連の台頭および第五福竜丸事件の露見により兵器としての肯定的評価が不可能になったという点が挙げられているが、ここにさらに朝鮮戦争による軍需産業の劇的な伸長とそれによる深刻な電力不足という補助線を書き加える必要があるだろう。この補助線はもちろん、一九五五年前後がその最初期と言われる戦後高度経済成長にまで伸びていくものだ。この補助線を引いておかないと、実際に原子力の夢＝原発が稼働し始めて電力需要の一角を担い始めるのが早く見積もっても六〇年代後半の軽水炉の導入まで待たなければならなかったという事実<sup>⑧</sup>と、(本書第四章で考察されている)正力松太郎を中心とした「平和利用キャンペーン」が奏功しつつも原子力に対する関心が五五年あたりから急激に薄れていってしまうという点の整合的な理解が難しくなってしまうのだ。これは原子力に関する知識がブラックボックス化する時期であり結果的に原発導入の条件が整備される時期(本書第五章「ブラックボックス化する知」)なのだからとりわけ重要だと言える。

ここで私が問題にしたいのは、「エネルギー革命」と呼ばれる事象とこの時期が重なっているという点だ。「エネルギー革命」が明確にいつごろからはじまったのかはあまりはつきりとしなが、少なくとも戦時中まで日本のエネルギー源の主要部分を担っ

られるのであり、その最先端に原子物理学、すなわち核の技術が置かれているのだ。この独自の発展史観を理解してこそはじめて、序章に引用されているように「原爆の被害国は最もフェアーに原子力の研究をやる権利があ」<sup>⑨</sup>ると述べつつも、原子力発電所の導入には非常に慎重であり続け、後には原子力資料情報室の初代表を務めた<sup>⑩</sup>武谷の位置取りが理解できるのだ。武谷にとって「技術」とは科学の進歩によって更新され続ける「客観的法則性」を「人間実践」あるいは「生産的実践」に適用するものなのだから、「技術」とは進歩発展の駆動力そのものなのだ<sup>⑪</sup>。当時の最高到達点が核エネルギーの解放なのだから、少なくとも武谷理論の内部では「原子力の研究」とはそれ自体で絶対に手放せない叡智であり、したがってエネルギー源あるいは電力源としての援用は不可欠ではないということになる。もちろんこの点について本書は全く言及していないわけではないが、こういった思想レベルでの「選び取られるべき原子力」を提示することで、動力源として注目される以前に原子力そのものが体現していたイメージあるいはイデオロギーを明らかにすることができよう。もちろんこれは武谷に限った認識ではないと考えられるが、戦後の反核・反原子力発電所運動をリードした科学者の一人であり同時に戦後の主体性論および新左翼の論理形成に大きな影響をもたらした武谷<sup>⑫</sup>の認識を整理しておく必要はあるだろう。戦後の「原子力の夢」を扱うのであれば「夢」として表れるまでにいかなる「作業」が行われているのか、その背後にあるイデオロギーはなんだったのか、考察する必要があるだろう。本書の提示する「被爆の記憶」と「原子力の夢」の結節点という問題設定はこのような重要

ていた石炭は、五〇年代の初めから価格上昇や供給の不安定さから石油への移行にさらされていた。それでも石油と石炭の経済的コストについては五〇年代をとおしてずっと揺れ動いていたのであり一〇年程度かけてゆっくりと石油に移行し、石炭は主に輸入に頼ることになっていったと考えられている<sup>9)</sup>。これは言い換えれば朝鮮戦争による「特需」とその揺り戻し不景気、その後の高度経済成長という流れの中で重工業の文字通り原動力であったエネルギー確保に一〇年ほどのあいだ、常に不安が付きまといつていたということになるだろう。つまり五〇年代半ばを中心にして一〇年ほどのあいだ、目覚ましい経済発展を遂げつつありながらも同時に深刻な電力不足に悩まされてもいた、と言えるのだ。この補助線を強調することで平和利用⇨原発導入⇨電力の安定確保という夢想が受け入れられ、かつ、「エネルギー革命の進展」すなわちエネルギー源としての石油の導入によつて原発の必要性が薄れ、夢がしぼんでいく、という流れを理解できるのではないだろうか。本書で提示されている「核エネルギー言説」の推移の少なくとも一部は、このように「核」にこだわらず「エネルギー」の状況とその言説」を広く紐解くことで、より広い文脈に位置づけることができるだろう。

## おわりに

上記二つの補助線は本書の提示する数多くのテーマの一部に過ぎない。このほかにも第三部で取り上げられる大田洋子『屍の街』論（第六章）や「第一次原爆文学論争」（第七章）は、中央と地方

の非対称な関係にも言及しており、原子力発電所が「田舎」に立地し主に「都会」に奉仕するという構図になっている点との同一性を鑑みると非常に重要な問題提起であろうと思われる。だがここで上記二つを挙げたのは、この二点がとりわけ現在のわたしたちの社会を考える上で重要な視座を提供していると思われるから。一つは、未だに政府も経済界も手放して最重要とする「成長」あるいは「発展」の問題、もう一つは、人々の関心の希薄化はその人々の利害と密接に結びついているというものだ。武谷理論が明確に提示しているように原子力は「動力源での平和利用」に転化される前からすでに発展史観に沿う形で「成長の突端」を体現するものだったのであり、戦後高度経済成長のイデオロギーそのものであったと考えられる。また、高度経済成長を支えるべきエネルギーが絶対的に不足しているという利害こそが原子力への関心を支えたのであり、したがって石油および水力などといった安定したエネルギー源が確保されれば、原子力は一般的な意味での利害関係の的とはならなくなり、原発への関心は希薄化しその知は「ブラックボックス化」し、結果、原発の本格的導入が可能となったと考えることができるのだ。

本書から引き出せるこの二点は今の私たちの社会をあまりにも鮮やかに描き出しはしないだろうか。原発の再稼働は日本の経済「発展」のために必要とされ、あらたな「成長」分野として海外への輸出さえ行われようとしている。「経済復興・発展の夢」を再び原子力が担おうとしている。だがそれと同時に福島および近隣地域の環境汚染やそれを原因とする避難者たちの困難な状況に対する関心は薄れつつあるように見える。「震災と原発事故の

記憶」は経済発展と結び付けられつつ同時に個々の被災者の苦惱は忘却される。利害と関心の二枚舌が今なお続く震災と原発を「記憶」として編成しなおそうとしているかのようだ。このように、本書は過去を単純に整理し提示したものではなく、現在の私たちの社会を見据える重要な批判的思考への入り口を提供するものとして、強烈なアクチュアリティを持つている。もちろん、本書を読めば必要な視座がすべて手に入ることではない。そのような書籍は存在しないであろうし、そういった自身の批判的思考を投げ出すような態度はとるべきではない。だがそれでも本書を手にし、その問題意識の扉を開けることで、それまでとは異なった視界が開けることは間違いないだろう。

## 注

- 1 復興庁のホームページで公表されている「復興の現状と取組」から [http://www.reconstruction.go.jp/topics/20121109\\_sankoo1.pdf](http://www.reconstruction.go.jp/topics/20121109_sankoo1.pdf)
- 2 レイモンド・ウィリアムズは『長い革命』(Raymond Williams, *The Long Revolution*, 1961, Wales: Partisan, 2011)において、個々人の認識が本文で指摘したように異同をはらみつつやり取りされ、取捨選択を受けつつ大きな様式を獲得していく作用を「コミュニケーショ

ン」と呼んでいる。

- 3 武谷三男『弁証法の諸問題…武谷三男著作集1』勁草書房、一九六八年、所収、一二五―一四〇頁。初出は一九四六年。
  - 4 山本昭宏『核エネルギー言説の戦後史 1945-1960 —「被爆の記憶」と「原子力の夢」』人文書院、二〇一一年、一〇頁。以下、本書からの引用はページ数のみ示す。
  - 5 原子力資料情報室 (ZNIC) は武谷を代表、高木仁三郎を世話人として一九七六年に発足している(吉岡斉『新版原子力の社会史…その日本的展開』朝日選書、二〇一一年、一五五頁)。二〇一一年の震災で高木が大きく想起される一方で、武谷への言及が少ないことは、それ自体、考察に対する問題かもしれない。
  - 6 武谷、一三九頁。
  - 7 詳しくは上述の吉岡および、桂秀美『原発発の思想史——冷戦からフクシマへ』筑摩書房、二〇一一年、を参照されたい。
  - 8 吉岡、一一八―一九頁。
  - 9 石炭産業の衰退とエネルギー革命については、島西知輝『日本石炭産業の戦後史——市場構造変化と企業行動』慶応大学出版、二〇一一年、を参照されたい。
- (人文書院 二〇一二年六月 三三六頁 二四〇〇円+税)